学童疎開　思い出の記

山上彩子
中央五丁目

昭和十九年八月二三日、家族の者と最後の夕食を済ませたあと、まるで昨日と同じように登校するかのように桃三小へ向かった。この時に、私を送り出す母の気持ちは一体どうだっただろうかと思う（この日以来、母は毎日トイレの中で、私を思い涙していたと聞く）。

私は隣の範子ちゃん（当時3年生）を迎えに行くと、家族と別れられずに、ワァワァと泣いていた。とても可愛想に思った。

新宿発午後十一時四五分発の汽車で信州へ向かったのだ。私達を乗せた汽車（中央本線）は中野で一旦停まった。その時、ポーッと汽笛が鳴った。

さすがに胸が熱くなり、大粒の涙が溢れ出た。十五分位してから、再び汽車は走り出し中野を後にした。しばらくすると、皆んなが静かになり眠りについた。しかし、私達四人グループは全く眠たくならずにふざけ合っていた。「おい、山上さん、おとなしく寝なさい」と野崎先生に再三注意されたが、どうしても眠る事が出来なかった。

小淵沢駅では、勾配がきつくなるため、最後尾にも機関車が連結され、前と後で坂を昇り切る作業が行われた。

朝、飯田線の伊那松島で降りた。そこからしばらく歩くと、お寺が見えてきた。

まず、たんぼが両側にあって、石の門を入って行くと、こんもりとした木立に囲まれた中にお寺があった。少し手前に石橋があり、そこを渡ると山門がある。そして二天門（仁王像）を通り抜けると広い庭の向うに本堂がある。鐘つき堂もあるというとても大きなお寺だ。

早速、班別に部屋が割当てられた。私達の班は十二人という大世帯で、私はこの部屋の班長に選ばれた。

翌朝からは拍子木によって起こされる。六時の起床。いち早く庭へ整列して点呼をする。そして東の空へ向って、「お父さま、お母さま、お早ようございます」と挨拶をする。まるで軍隊生活のようだった。このあと乾布摩擦をして、食堂へ集り朝食をする。味噌汁の身にトーガンが入っていたのにはびっくり

して、最初の頃は食べられなかった。

夜は消灯が九時で、二人の先生（野崎・鷲尾先生）と寮母さんとで夜通し見回ってくれたらしい。

一週間もすると、少しつづ生活に馴れてきた。この頃から家族からの手紙が届くようになる。すると一遍に東京が恋しくなり、母に会いたいという気持が強くなり、居ても立ってもいられない。どうにも自分の気持を抑えられなくなる。私と範子ちゃんは、帰りたい帰りたいと泣いてばかりで、寮母さんから、「班長さんのくせに意気地無しね。そんなに帰りたければ帰りなさい」と叱られた。二人は泣くのを止めようともせず、一目散で外へ飛び出して行き、先生に連れ戻されたりした。こんな事を何度も繰り返した。

ある日、先生は皆を集め、寺を逃げ出した者がトンネル内で汽車にひかれて死んだという話をした。

九月に入ると家族の面会が始った。近所の小母さん達で、みんな顔見知りだったから、小母さん達へへばりついていた。私の家では、九月十四日に母が幼い妹（当時四歳）を連れて面会に来た。この時の妹のコートが、鮮かなミドリ色だった事を今も鮮明に覚えている。

飛びついていきたいのに、うれしさのあまり口も満足にきけない状態だった。夢のように楽しい日が二、三日続いた。母は宿屋に私を呼んで、丼物を食べさせてくれた。

別れの当日、私は母に、寮母さんになって、ここにいつまでもいて欲しいと無理を言って困らせた。

何故か突然に集合がかかり、先生は皆を庭へ集めた。一つずつのリンゴが配られた。あちこちで親子の別れを交し泣いている。私は母の前では絶対に泣くまいとがんばったが、「一緒に帰りたい」と言ってしまった。これ以上母のそばにいれば、泣き出してしまうと思い、なるべくそばを離れて悲しさに堪えた。

先生の「これから山へ出かける。一班から前へ進め！」の号令で前進した。面会の人達へ一斉に「さようなら」の挨拶で別れを告げた。門を出た所で、堪えに堪えていた涙が一気に溢れ出し、大声を張り上げて泣いた。いつまでもいつまでも。こんな私に、先生は困った様子で、いろいろと慰めの言葉をかけてくれた。

山へ出かけたのは、先生の思いやりからであったと思われる。この夜は、一晩中ふとんの中で泣いた。

秋が訪れ、お米の収穫期がきた頃、疎開児童の中から五人が選ばれ、稲の刈入れを手伝いに行った。私もその中の一人で、金沢さんのたんぼへ行った。お昼には大きなおにぎりが出され、とてもうれしかった。この時の様子が、信濃毎日新聞の十月十一日付に掲載された。

この頃は、すでに食料不足で、毎日の御飯の量がめっきり少

なくなっていたので、お百姓さんの所へお手伝いに行くのがものすごくうれしかった訳だ。味噌のついた大きなおにぎりは何にも増して大きな魅力だった。

私達のお寺には、野崎先生と鷲尾先生の二人がいらした。野崎先生は物静かなやさしい先生だった。

一方の鷲尾先生は、男っぽく、いつも兵隊服を着ていた。そして、男の子達には、いつも剣道を教えていた。軍隊帰りのせいかとても厳しいところもあった反面、女の子には、とてもやさしく可愛がってくれた。

ある日突然に辞められ、家へ帰るという。みんなびっくりして、泣いて別れを惜んだ。先生の得意だった「轟沈」の歌を唄った。そして先生は静かにお寺を後にした。私は和子さんと二人で裸足で先生の後を追い、「先生、帰っちゃいや！」とすがりついて泣いた。先生は私達の頭をなでながら、「きっと帰ってくるから、泣いてはいけない」と言い、手を振り払うようにして行ってしまった。

こんな突然の出来事があってから、お寺の中は何となく静かになってしまった。この先生の代わりに藤森先生が来られた。いつも冷静で、詩人のようなタイプだった。

毎週土曜日の夜は、演芸会が開かれた。各班別に出し物を用意して参加した。どういう訳か、毎回私は野崎先生の指名を受けて歌を唄わされた。「ブンブン荒鷲ブーンと飛ぶぞ……」という歌が私の持歌になっていた。

ある時は、和尚さんより本堂に集合させられて「般若心経」のお経を教わったりした。お腹が痛んだりした時に、このお経を誦えると良いなどの話もされた。

秋のある日、みんなで庭へ出て思い思いに遊んでいる時、私は本堂の前にある二本の木の一本に手頃な枝を見付けた。鉄棒が好きだった私は、早速この枝にぶら下がったり懸垂をしたりしていた。足が届く高さなのに、どうしたはずみか落ちてしまい、気を失った。今まで鉄棒から落ちた事など一度もなかったのに、何故だかわからない。目が醒めたときは、布団に寝かされていた。頭を打ったらしくズキズキと痛んだ。

数日後、地元の炊事係の人が私に話をしてくれたが、「あの木は仏様の木だから、必ず落ちるんだよ。今年に入ってあんたで三人目なんだよ。もう、あんなお転婆をするんじゃないよ」と言われた。

十月のある日、学校から六年生全体で八里の行軍をするという。いくつもいくつもの山を越え、頂上に着いたとき諏訪湖が見えた。帰り道はもうヘトヘトで、足を引きずりながら歩いた。お寺近くの床屋の前を通ると、中にいた男の子達が、「お父さんが来ている」と教えてくれた。しかし、どこにいるのか、一向に姿を現してくれない。皆が言うには、私を迎えに来たのだ

そうだ。母が面会に来たときに、私が帰りたいと言ったのを、きっと心を痛めて迎えにきてくれたのだと思う。

皆が帰っちゃいやだと言い出した。父はそっと本堂の前の廊下に私を呼び出し、「東京へ帰るか？」と聞いた。

帰りたくて帰りたくて仕方がない毎日だった筈なのに、班長をしている手前もあってか、実際の気持ちとは裏腹に、「帰らない」と返事をしてしまった。待ちに待った今日のこの日を、あっけなく答えを出してしまった。父は「そうか」と言っただけで帰って行った。父と子の面会はこれだけの会話だった。

夜、野崎先生が私を呼び出し、「山上さん、えらいぞ！今度から先生が相談相手になってあげるからね」とやさしく私の肩へ手を置いて言ってくれた。

床の中で、自分が心にもないことを口にしてしまったことを後悔ばかりしていた。何故父と一緒に帰ってしまわなかったのかと。

学童がお寺に行った当時はまだ食糧事情もよく、三時になると地元の婦人会の人達が、さつまいもを蒸したのをおやつとして持ってきてくれたりした。学童数も八〇名ほどいたから、持ってくる方も大変な話である。

しかし、これらのこともほんの束の間ですぐに終わってしまった。何しろ、いつもいつも空腹だった。洗面所の棚に置いてあったハミガキ粉を誰かが盗んで食べてしまったらしい。ミカンの皮、リンゴの芯などは残さず食べた。口に入る物なら何でもよく、親が面会に来ると、胃腸薬を買ってもらい、それまでも良く食べた。二錠、三錠の数ではなく、十錠位を一辺に口に入れよくかんで食べるのだ。今よりも、もっともっとお腹がすいてしまうのに……。

更に、飢えた私達は、昔食べた天丼だとか、うな丼だとか、おまんじゅうなどの、ありとあらゆる食物を絵に書いた。そして書き上げては、頭がおかしくなったのではないかと思われる位わめいたり泣いたりして、食べたくても食べる事のできない苦しさに耐えた。裏山へ馳け登って大声で泣いたりした事もある。とうとう御飯の量も湯のみ茶わん一杯程度になった。

又、寒さは格別で、東京では味わった事がなく、銭湯の帰りには髪がすっかり凍ってしまったり、手拭はすぐにコチコチに固くなってしまう。

着る物も子供だから自己管理ができず、冬になっても夏物を着ていたりして、面会に来た母を嘆かせた。髪には、どの子もシラミの卵が沢山取り付き、悲しかった。

この冬から、一合ずつの牛乳が与えられるようになる。飢え過ぎた私達は、この一合の牛乳が勿体なくて、すぐ飲んでしまう事ができなかった。

まず、牛乳を弁当箱へ入れ外の縁側へ置いておく。翌朝には、

カチンカチンに凍っている。これを冬だというのに食べるのだ。何ともいじらしい仕草である。

お正月を迎えた。大きいお餅を五個も食べさせてもらった。そして夕食時のお餅は又残しておいて弁当箱に詰め、夜中に食べようと寝床の中に入れる。

消灯後、よその部屋が寝静まってから、部屋の全員がそーっと起きて弁当箱のふたをあける。当時の弁当箱はアルミやアルマイトなので、どうしてもカチャカチャと音が出てしまう。

突然、廊下に足音がした。誰かが「先生だ」と言う。みんな眠ったふりをして、弁当箱を足の方へ押しやる。戸が開いて先生が入ってきた。いきなり電気を付けて一人の布団をめくった。見付からずに済んだが、ひや汗が出た。食べ物に飢えているのだから、今食べてしまえばよいのに、あとから食べるという異常な現象だ。

正月が終わって何日か過ぎた頃に、姉が山口さんの小母さんと二人連れで面会に来た。

姉は、母から薬を預かってきたと言って私に渡した。中身はブドウ糖の粉末だった。班の連中も少しでいいから飲ませて欲しいと言う。ワカモト、エビオスや肝油まで好んで食べていたので、私のブドウ糖は、あっという間に無くなってしまった。

姉が帰る日、私と正治ちゃんとで見送りに行った。途中の食堂で御飯を食べさせてくれた。正治ちゃんは別れがつらくて泣いてばかりで、御飯にも手をつけなかった。こうした正治ちゃんをみていたら、私も悲しくなって人目もかまわずワァワァと泣いてしまった。この時、ちょうど通りかかった寮母さんが、二人を連れて帰ってくれた。

いつもいつもお腹をすかしていた私達だったが、ある日、私に班の子が「お姉さん、お腹がすいた」と訴えた。私は、すぐに内緒で裏からお寺を抜け出した。そして顔見知りの金沢さんのお姉さんを尋ねた。

すぐに火燵（こたつ）へ入れてくれ、いろいろと食べるものを出してくれた。そして、おあがりと言ってくれた。私は、一人だけで食べる訳にはいかないと言うと、紙に包んで呉れた。それをポケットに入れると、一目散でお寺へ持帰り、みんなで分け合って食べた。

私を、この金沢さんのお姉さんや芝さんのお姉さんが、自分の妹のように扱ってくれた。それから牛のいるおばちゃんも可愛がってくれた。

この小母さんは、朝、学校へ行く時、いつも野良仕事をしていて、「牛の小母ちゃん、行って来まぁす。」と私が声をかけると、いつも「いっていらっしゃい」と言ってくれる。ある日、この小母ちゃんが私にこんな話をしてくれた。「うちのお父さんがなあー、あんたのことを自分の子みたいにしているって」。私もこのおばちゃんが大好きで、いつ会っても「牛のおばちゃん」

と呼び、慕っていた。

私にとってのある事件。

皇后陛下より恩賜のビスケットがお寺に届いた。みんな飢えていたから、すぐに食べてしまった。しかし、私はこのビスケットに全く手をつけず、東京にいる妹に食べさせてあげたいと思った。自分のトランクの中に大切にしまい込んでおいた。

それが、ある日学校から帰ると、自分の荷物の中からビスケットが無くなっていた。びっくりして、すぐに先生の所へ飛んで行った。先生は、今度は盗られないようにするんだよと言って新しいビスケットをくれた。

二月になったとき、六年生は中学の入試のため東京へ帰るという事が耳に入ってきた。夜、形ばかりの口答試問の練習を何度かさせられた。この東京へ帰るということが現実となった。

帰る日が近づくにつれて、うれしさで度々東京の夢を見た。班の下級生達が、私に持帰って欲しいといっておみやげをくれた。この中には、私のビスケットの盗難事件にかかわったという子がいた。私に謝罪し、そして自分が大切にしていた七人姉妹の人形のうちの二体をくれた。

私も、いつ会えるかわからない班の子達へ、いろいろの物を置いた。おみやげでボストンバッグが一杯になった。

いよいよ帰る日が来た。

やはり名残りおしい。地元の人達、お寺の人達もみんなで駅まで見送りに来てくれた。いざとなると別れがつらくて、男の子も女の子もみんな泣いた。「牛のおばちゃん」も来てくれ、私の荷物を駅までもってきてくれた。

野崎先生は、途中まで汽車に乗ってきて見送ってくれた。そして別れる時、私は先生と握手をした。先生は「みんな元気で暮らすんだぞ」と力強い声で挨拶をした。汽車の中でも、今一体自分はどこにいるかわからない放心状態の中にいた。

翌朝、中野駅に着いたとき、多くの出迎えの人達でにぎわっていた。私の家では、母と姉と浅草からおじちゃんが迎えにきていた。この日の東京は、昨日から降った大雪が随分と積っていた。

皮肉なことに、私達が東京へ帰って来てから戦争はますます激しさを増し、三月十日の大空襲、五月二五日の大空襲に遭遇する。

この体験記を書くにあたり、少しでもいいから楽しかった事も書こうと思ったが、つらかった事の方が多く思い出されてしまう。戦争は無情だ。二度と戦争は体験したくないし、あってはならない。